

山と博物館

第42巻 第3号 1997年3月25日

大町山岳博物館

二人展開催にあたって

大町山岳博物館

西條夫妻は木崎湖のそばに山小屋を持って、もう二十年以上も大町通いを続けておられます。

八東さんは湖沼を研究する陸水学者。十五年ほど前、研究のために行ったブラジルで月夜の河畔をスケッチして以来、山や建物、そして水のある風景を、水彩を中心に描き続けています。

紀子さんは、これまでに通算十八回の個展を開催してきました。二十年ほど前からは山や木などを、水彩や油彩を主に描き続けています。



西條八東 作「白馬鍾」(水彩)

特別展

「旅」西條八東・西條紀子 二人展(3/15~4/6)

西條紀子 作「冬のこぐま山」(油彩)



一九八八年の紀子さんの十三回目の個展からは八東さんとの二人展となりました。

このたび大町にゆかりの深いお二人の作品を初めて地元で発表していただくことになりました。ご夫妻が歩みをあわせての作品の発表は今回で七回目です。

北アの山々や大町周辺はもちろんのこと、スイス、ブラジル、アイスランド……旅の途次に描かれた作品の数々は、それぞれ個性的でありながら、必ずやお二人に共通の心の旅をも表しているにちがいありません。

月曜日を除く三月十五日から四月六日の間、山岳博物館の教室と講堂での開催です。

ご高覧のほどよろしく願い申し上げます。

黒部に生きて(二)

曾根原 文平

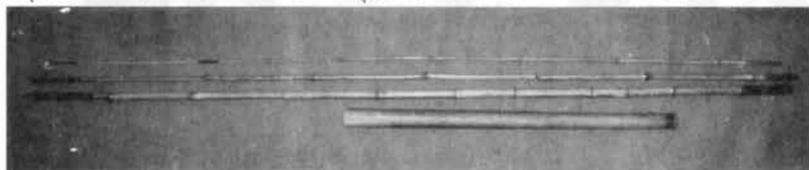
道具あれこれ

竿

○私の竿は四分六か五分五分の延べ竿でね、要するにしなり方が全部均等な一本の竹なんです。七三つという手元から七分が硬くて、先の三分が軟らかなんです。だから私の竿は手首だけで合わせられる。そういう竿はうんと楽なんです。魚が掛かるとね、しななって丸くなるけれど折れるってことがない。

イワナがハリをくわえる時は頭を上しているから、何百匹釣ってもみんなそうだけど、イワナの上顎にかつかいでいるんです。それで、くわいた勢いを利用して引き抜くから楽に上がる。これが飛びついでから下に向いた時に上げるとすこし重たい。水面から出た時の頭でもわかるけど、大きいやつが掛かると一度途中で力を入れるとポーンと水から上がってくる。竿がまだしなっているからさらに力かけると受け網に飛び込んで来るんです。全部ごぼり抜きますよ。

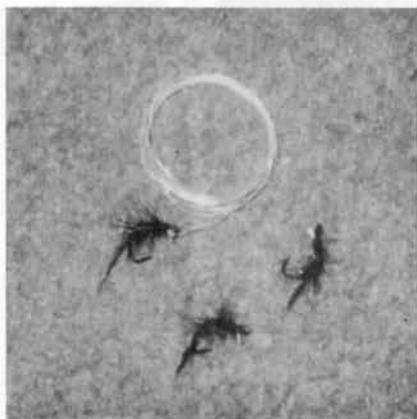
黒部では四十四、五センチくらいイワナを釣ったこともあるんですが、



竿 (のべ竿を継ぎ竿に改造)

中にはこつちが遅いか魚が跳ねたかして、口にかからないでエラにかかる魚もいます。そうすると重たいんだが上げると小さいから、力かけた時に受け網とは違うところへ飛んでつちやう。大抵のやつは水から上がる時の手応えでね、大きい小さいがすぐわかる。黒部で商売でイワナ釣る時には、全部網に入れなきゃだめなの。砂の上落としては、とんくらくらくと跳ねているやつを捕まえてハリ外してたら、もうその間に二匹も三匹も釣り損なってるのと同じことだったんだよね。

毛バリ



毛バリ

○私は海津の八号のハリをずっと使ってたんだがね、海津のハリっていうものは何かにつかると当たったほうに針先が向くようにねじれている。だから必ずひっかけかかると、このねじれがとてつよいの。毛バリの作り方だけども、まずハリス（ハリをつなぐ糸）を通すチチワを作るんです。一番細い三号の三味線の糸を折り曲げてハリ

と一緒に黒色の絹手縫糸、私たちは絹小町と言ったが、それをチチワを残して三味線の糸が見えなくなるまで巻きつけるんです。チチワはチチワ（ハリのもと）よりもあまり上に出ていけない。釣る時になって当たりが違ふんです。それで今度はニワトリの毛を巻きつける。地鶏や外国産の鶏冠の後ろの毛（後頸）の羽の根本に糸をつけてね、それをハリに巻きつけていくんです。毛にも良し悪しがある、羽の毛（羽枝）が長いと、何回かやってくるうちにイワナの食いつきの悪い場合がある。だから私は毛の短いやつを使っています。

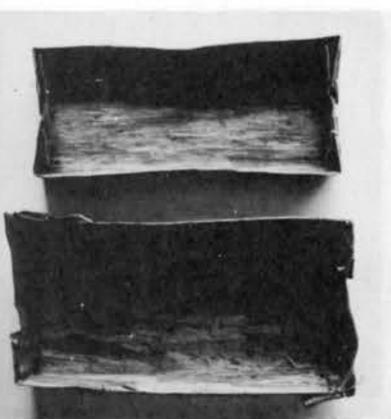
毛バリの調子のいい時には一本のハリで百匹くらい釣ってもほどけなかった。上顎にハリが引つかかるだけだから毛バリがすれない。口の中に入っちゃまうと毛バリを取る時にすれたりしてハリをいためちまうんですよ。

あとね何回も毛バリを投げ込んでいると岩にチチワがぶつかって欠けることがある。そうすると巻いた糸が抜けちゃう。だから接着剤みたいなもので着けたり、昔はウルシを着けて乾かすと、いくらチチワが欠けても抜けなかった。山に行く時には毛バリを作る道具を一式小箱に入れて持っていたもんだが、年間二十か三十くらい持っていたかなあ。

一日少なくとも六十匹というノルマで七十日から八十日山に入ったから、四千五百匹くらい釣る勘定だった。二年くらいはノルマを達成できたけど、毎年釣るからイワナも減ってきてたし、体調にも左右されるでね、三千匹くらい釣ったら嫌になって山降りてきちゃった。

皮鉢

○製品にしたイワナを入れて里に背負い下ろす箱を皮鉢って言うんです。サワグルミのうんと大きな木が黒部にはたくさんあったんです。木の上と下へノコギリで切れ目を入れて、ナタを使ってパカンとはぐ。そいつを丸

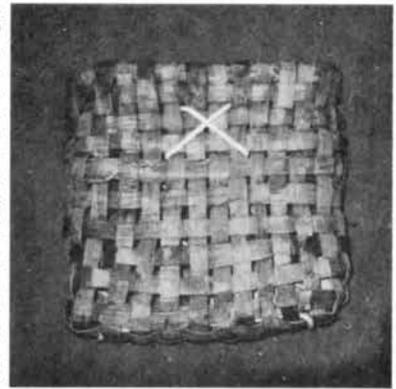


皮鉢(サワグルミ製)

のまま持ってきてね、外の皮を全部を落とすからすべすべしとるわけなんです。それを外側にして箱を作る。

長さ四十五センチ、幅三十七センチ、深さ二十七センチの箱を作るには木の太さ六、七センチの幹から八十五センチくらいの皮をはくんです。そして合わせ目を革針（先が三角の針、クマなどの皮を縫う時に使う）でね、麻糸で縫うと開かない。最初は生だからグニャグニャしてると、火棚に一晚上げるとカーンと乾いちゃう。ベニヤ板と同じようにカチカチになるんです。使う時は後で話しますが、イワナをいっぱい詰めて針金で締め上げるんだがね、投げたついでに壊れたらいい丈夫な箱になるんです。板で作った箱は割れるけど、皮で作った箱は割れない。釘も使っていないから、乾くと縫ったところだって丈夫になっちゃうんです。

さて川鉢に製品を並べますがね、頭、頭、しっぽというように縦に三匹くらいずつ並べられていくんです。それで一杯になると、ネズコの流木で作った板を乗せて重石を乗せるんです。板がズーツと沈んでいく。イワナを入れちゃ板を敷いて重石を乗せるんです。そうするとイワナが平べったくなるんですよ。



ネコザ(ネズコ製)



魚籠(フジ製)

ね。カンカラカンに乾いているから、普通は無理に押さえりやパリンと割れるですが、だんだんと押しをかけるからイワナはちつとも壊れなくて平らになっちゃうんですよ。そうすると売りに行った時に買う方がびっくりするんですよ。「魚屋さん、どうやってこんなにきれいに作るんだ」と。重石は最後に箱より高くしておいて、棒締めといってね、棒に石をぶら下げて(テコの原理で)押しをする。板が持ち上がらないように針金で縛っておくから、棒を放すとイワナが中でワーツと膨らんで箱がばんばんになる。こうなれば転がしたって何したって絶対大丈夫。

一人でやってる時は、人に頼んで黒部まで米を運んでもらったんだが、帰り道はイワナのぎっしり詰まった皮鉢を背負ってつてもらったこともあるんですよ。「おめさま、イワナは別にやるから魚欲しいと思ってるこれ開けたら収集つかないぞ、絶対これ開けるなよ」と念を押した。すごい圧力がかっているから、脅かしじゃなくてね、開けたらワーツと持ち上がってみんな出ちゃうんですよ。

ネコザ

○ 魚籠がいっぱいになりや、背中のネコザにイワナを入れる。黒部にはネズコがいっぱいあるからね、その皮をはいで作る。これも

だいたい皮を八十センチくらいにむいて来て、大きい木ほど皮は厚いが、それを半分に勝ち負けのないように割るんです。外側のザラザラした皮をとるためにね。富士弥さんは上手だった。足の親指で端を固定してスススとナイフで勝ち負けのないようにスパーンと割りましたよ。内側のいいほうを使って外側は捨てちゃう。三十分もありゃ編んでしまう。魚籠も箆を採ってきてすぐ作っちゃう。何やっても早かったですよ、私は魚籠は里から持っていて使ったけど。

イワナを観る(私の釣り方)

○ イワナは利口なんです。他の動物に食われちゃいけないってわけで、影が映ればピンと逃げる。ところがね、中には人間の顔をすつと見ているやつがいるんですよ、淵でね。あそこはいるなって思ってたんですけど、出ないんですよ。普通なら絶対出るんですよ。すると流れの水が下の段へ落ちる近くのところで見ているから逃げないんですよ。いめつから見ているから逃げないんですよ。いたいいたつと思ってる、そおつとそいつの前に流してやるけど食わないんですよ、何度やっても。終わりにや頭の上に毛バリ止めといつて、ピンピンやっても食わない。ところが次の落ち込みに落とすつもりで毛バリを流して

やると、振り向いて食ったんですよ。人間がこれは何だろうと思うのと同じことだね、イワナもくわえてみて判断するんですよ。食べられるものか、食べられないものか。黒部のイワナはくわえて一秒弱で吐き出すね。滝川辺りは〇・五秒だね。こちらが魚見えた時には、もう毛バリをくわえて離して沈んじゃうからね。滝川は釣るには難しいですよ。川に入っただけいきなり出たやつを釣れりゃいいしたもんだ。二度も三度も出りゃ手の方も慣れてきて釣れるんだがね。黒部の方が遅いんですよ。

前にも話したけど釣り落とすとね、スーッとまた出るけど絶対に食わない。釣り落とすと淵をいくつも作ると、翌朝行ってもスーッと出てはくるけど釣れないんですよ。ところが別の誰かに釣り落としたりとを覚えて釣らせるのとね、私より下手な人でも釣っちゃうんですよ。流し方が違うからくわえないんですよ。知ってるんだねちゃんと。ある程度の記憶はあるようだね。

○ 黒部の内蔵助の出合の下行くとね、水の中あまり大きくない岩の影一つ一つにイワナがいるのが見えた。その岩の間に毛バリを流すと二匹が同時に出てきちゃう。だからそれぞれイワナに近い淵に流してやるんですよ。そうやるとね見える魚はだいたい釣れるんですよ。

○ 九月に入るとどうゆうわけか、一時魚が全部浮くんですよ。どこの大きい淵に行っても浮いていて、流れて来る方にみんな頭向けてるんですよ。最初は知らないから真ん中にと投げ込んだんですが、二十匹浮いてりゃ二十匹がざあーと来て、一番早いやつがくわえて後は沈んじゃう。これじゃダメだからね、流れの先頭にいるやつから釣っていくんですよ。先頭から釣っていくと、釣り上げられたイワナより後ろにいたイワナは何が起きたか知らなんでいるわけ。だから今度はそいつの

前に投げ込んでやる。小さい淵だとイワナがすこし前後して並んでいるから、先頭にいるイワナの鼻先に毛バリを投げ込んでやればいいんですよ。二十匹浮いてりゃだいたい二十釣れちゃった。当時はね、今はどこにもないがね、そんなところは……

○ 荒れるとね、平の小屋の下流には河原があったそこに中洲ができた。雨が降ると砂地より水かさが上がってね、イワナが端に来てすくえたりするんですよ。どんなに川が荒れてもね、イワナは必ずそういう浅瀬で過して、平常の水位になると帰る。だから絶えないと思うんだよね。いままで大きな洪水がいつぱいあったと思うんだがね。それが源流の魚としてイワナが残っている所以だと思う。

ある時ね、雨降りて道が川みみになってたことがあった。そこを背中を出してイワナが泳いでいたんですよ。予想のつかない大水が出るよ、とんでもないところも川になってしまふ。その端をね、イワナはどんどん上がって行ける魚だと思っただよね。山奥にまでイワナがいるっていうのは、そういうことじゃないかと思うんですよ。

サバイバルを体感する

昭和二十三年の八月に富士弥さんと黒部で出会ったわけですが、その後二度一緒に行動して帰ります。同じ年の九月と、十月にね。

○ 九月の十日ごろね、もう米も底をついてきて山終いにしようと思つたら雨が三日ほど降り続いた。雨も降るし、釣りもできないから小屋で寝たら、富士弥さんはお粥を炊いて、曾根原さんこれ今日一日の分と、手のひらぐらゐを渡されて寝てろってわけです。それで二日寝たんですよ。三日目にもいくら降ったんですがね、立山のほうは晴れてきた。それで帰り支度してね、その時ふたつの飯盒にそれぞれ二合以上炊いて、ひとつずつ持っ

て帰るだつていうじやないですか。いままでお粥食わされてたもんで、たまげたねえよく米をまだ持ってたなあと思つてね。

御山谷の小屋を十時に出たもんで、平の小屋に着いたのがお昼ごろ。それなのに、さあ風呂入って帰えろうだつて。あそこには温泉が出てたんですよ。「こんなことしてりや峠に着かないよ」と言つたら、「はじめからわかつてる、途中で野宿だ」。峠の小屋に泊まっても大沢の小屋に泊まっても野宿して明日大町へ帰つても同じことだつて。慌てない人だつたね。針ノ木谷にいるうちに夕方になつてね、それで富士弥弥さんはかき木の皮をはいで、太い風倒木のかげに屋根作つて火を焚いた。風倒木のおかげで風もあんまり通らなかつたし、屋根が生皮だからいくら火を焚いたつて燃えることはないし、夜露が凍げた。

○ 十月の十五日にはね、イワナ釣つたり獣獲つたりしようということで黒部に入ったんです。大沢の小屋のまわりでワナで獣のエサ用にウサギを獲つたりしながら黒部へ入つた。ほつほつ帰ろうかなという十一月の二日の晩にみぞれが降つたんです。「ここでみぞれが降れば峠は雪だから、下らなきやいけんね」と言つたら、「いや一回ぐらいいみぞれが降つたつて大丈夫だ」と言う。そしたら三日にまた降つちやつて、今度はみぞれじゃなくて雪がいくらか溜まってるんです。「富士弥弥さん、これ以上降られりやいけんねえ、もう帰えろ」と言つたら、「じゃあ明日の朝六時に出発ししようや」とことになった。黒部に入る時富士弥弥さんはリュックにワラフつけていてね、夜になつたらそれでシツペソ（カサカケワラジ）を編み出した。カカトにあてるやつも作つて、「曽根原さんこれ履いてきましょ」と言つて。最初から雪踏んで帰る予定でワラを用意してたんだよね。朝、外に出てみたら雪に押されて笹が帰り道をふさいじやつた。完全に押さえつけられていないから足

が笹の中へ半分入つて歩きずらかつた。

ようやく針ノ木谷から別れて針ノ木峠に行く途中に紫丁場という紫がかった花崗岩の岩がある、冬は雪渓になるとのだが、そこに着いたら五十七センチちかく雪があつた。富士弥弥さんが荷物置いて、「俺先行って来るで曽根原さんはそこでひとときり（一時）休んでましょ」と言つて先にとつと空荷で歩いて行くんだよね。そして帰つて来て、「さあ行くだ、曽根原さん先行きましょ」。いったん道踏んだとこだから私は楽なんですよ。百メートルくらいつけてあつたかなあ、今度は富士弥弥さんがそこで休んで私が先に道を踏む。私はまだ若いから荷物は背負つたまま雪を踏んでいき、富士弥弥さんは私の後すぐに着いてきてもいいようなもんなのに出来ない。先行つて休んでると、富士弥弥さんはこのこのこ来だよね。最初はああ面倒くさいことやつてるなあと思つたんだが、なあに、若くて体力があつたつて五、六回やりや、今度は荷物置かなきゃ雪の中歩けなくなるの。

上に行くに従つて雪が一メートルちかく積もつていて、膝が五十七センチくらい埋もれた。でもこの歩き方で難なく登れた。荷物を置いて行くと、普通一回しか歩かないとこ、戻ること二回歩くことになる。それで荷物背負い直して今度踏んだとこ歩く時には休んでた人は三回目、踏んだ人は四回目を歩くことになるから結局楽なんだよね。

あん時、勝手に初めつから荷物を背負つて歩いて行つたのに、富士弥弥さんはよく文句言わなんだもんだ。やつてみてわかつた。山にのまれないで自分のペースで登る、これなんだね。

佐々成政が天正十二年だかに冬の針ノ木峠を越えたということを、机上で考えりや大変なことだと思ふんだが、こういうやり方で行けば冬山もえらい心配したことはないんだ

な一つと思つた。あんなのは猟師が十人もいけば御の字ですよ。道ができてそこ歩いて行くんだから、ちつともおつかなくねえし疲れない。

それから針ノ木小屋が三百メートルぐらい上に見える、春先だと雪渓になるとこに出た。トラパスしようとする、雪がどどん落ちてきて、いくら踏んでも道がでない。吹雪いてきちゃつて、六時に出たやつが二時まわつてるんですよ。小屋に着いて戸を開けて入つたら、いまと違って隙間だらけで雪が吹き込んでる。泊まるとこなんてありやしねえんだよね。波打つように積もつちやつて。こりやダメだよ、泊まれないよつて、見たら三時せ。九時間ぐらいかつた。富山側はごんごんごん吹雪いてたが、信州側見たら晴れる。いくら雪がなかつた。こんなものはわけない下れるわつて、大沢の小屋まで四、五十分下りて、それで大沢の小屋へ泊まつた。

黒部川今昔

○ 悪い（危ない）川なんです黒部は。平を中心として下流は御山谷ぐらいまではそんなに悪いとこはなかつた。それから御前谷まではあまりよくないんです。川には大きい岩がいつばいあつて滝になつたりしてね。河相がずつと悪くなつてね。上流は上廊下までは良かった。針ノ木谷があり、ヌクイ谷があり、中ノ谷があつてそして本流。バラエティに富んだ場所があつて釣つてけつこう釣れたんです。東沢まで釣つて、途中どうしたも通れないとこは丸太を渡して通つたりして。帰りは、東沢の合流点の下から平の上までは流れがなだらかなもんで、魚籠や背負子なんかは全部頭に縛りつけて川を流れて行きました。歩くよりうんと早い。足は半分曲げてるからポーンと川底をつけば、首は水から上に出る。泳ぐことはいらない。楽なんですよ。山や

川に慣れてくりや、そういうこともできた。

○ 黒部はよほど足の丈夫なもんでなけりや行かれないとこだつた。道がないんだから川端を通れば高巻きするとか、反対側へ渡渉するわけだからね。いまの上廊下は東沢の奥黒部ヒュッテまでは道があるが、それから先はない。入るなら高巻きや渡渉しなきゃ奥へは行けないんだよね。この辺が昔の黒部の残つてるところ。水は減つてない昔のまま。上廊下の入り口つても東沢よりちよつと上。ビンガね、廊下の口つていうか門のような急で狭い岩盤で、普通は入れない。ところが富士弥弥さんとやつて二十四年。台風の後で上流から砂が流れてビンガが埋まつて、膝から下ではちやばちやばちやばちやと中廊下まで歩いて行けた。そういうこともあるんだよね。富士弥弥さんも黒部に何十年もいてあんなこと初めてだつたつて。その時はイワナが端つこの岩の付け根の砂地で一列にひつついて並んでいた。びつくりしたねえ二人で。

○ 黒部ダムの工事以前はダムから下の水は五倍はあつたですよ。いまはダムのまわりのヘドロや雑排水が流れてたりして岩が黒ずんで汚れてるし、棒小屋沢は取水されているからあれも五分の一くらいになつちやつた。本流との合流は十字峡になつてはいるんだが、棒小屋沢の水が減ちやつたからもう昔の十字峡じゃない。S字峡だの半月峡だの水も少ないですよ。黒四谷から仙人谷のダムまでの下廊下の様相だけは変わつていないけど。川に水が少ないってことは致命的ですよ。大げさに言えば地球ができた時からの黒部川ではなくなつちやつたつてこと。昭和二十年代から三十年代の私の見た黒部、ダムができるまではまだほとんどの自然だつたですよ。完成と同時に昔の黒部つてものはなくなつちやつた。電力は大事だが、残つてりやあいい川



針ノ木谷出合(1964)

だったと思うがね。昔の黒部川を見たのは私たちが最後だったね。

今、北アの溪流は

○ 大町近辺で一番イワナがいるのは籠川です。昔からそうです。鹿島川の支流の大冷、小冷にももちろんいましたし、大川沢にだっていたが、昔みたいな水量はないし、魚も少ない。

籠川は魚を放流しているから一日のうちいい時期を見計らって行くと釣れる。二月から解禁になるけど、六月ころ雪が出て、お昼過ぎ一時か二時ころ水が増えて、そうなるとうよく釣れるんです。暗くなるころが面白いんだがハリが見えないでね。そういう時は脈釣りって言って、手応えがあったら合わせやるんですよ。おもしろ味はないけどね。

毛バリ釣りはイワナと合わせとどっちが早いか、それがおもしろいんです。だからいま

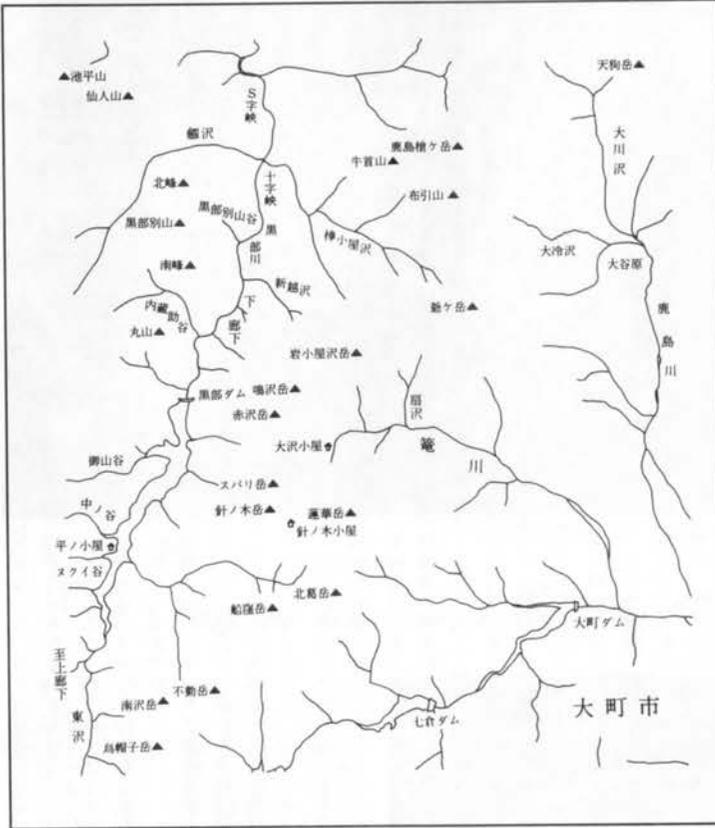
釣りに行って三匹も見えりやうらしいですよ。一匹か二匹釣れりやないだかね。もちろん全体的に昔に比べてイワナは少ないわね。というのも川が変わってしまったこともあるが、放流した魚は割合に釣り安いし、案外地元の人には知らなんでいるけど、旅の人がたくさん釣ってますしね。

○ 高瀬の奥へ行くと、川九里沢に東電の沈砂池がある。何年に一回だか砂を払うんですよ。砂を払うと五郎沢の下辺りまで淵ついでう淵は全部砂で埋まっちゃう。せつかくいついた魚がいなくなっちゃうんですよ。いい年は川九里にも上がってるんだが、高瀬ダムの上流にヒル沢つてもあるんですよ。不動沢と濁沢の上流にまずヒル沢つて

沢がある。その上に三ツ沢、西沢と三つあるんですよ。西沢が一番深いんですがね。三ツ沢もヒル沢も三百メートルくらい奥行があった、そこにはいるんですよ、イワナが。

○ 五郎沢はいます。いるけれどなかなか時期がある。川の左岸に渡らなきゃならんからね。容易には行かれないんだが、五郎沢を得意にして入ってる人もいます。

○ 高瀬川の流域にはイワナがいるって話が昔からあった。三年ばかり前に友人と湯俣、水俣に泊まって翌日千天の出合まで歩いて行って、彼は天丈沢の方、天丈沢には登山道がついてるからね。私は川越えて千丈。千丈はいい淵ばかりだった。やっぱりいいんですよ。



黒部周辺概略図

よね。いないってのは水の色見てもわかった。

○ 籠川のひとつ手前にワリモ沢つてあるんですよ。水量は多いしい沢なんだけど、こももない。何しろこの水の中に入りや足が切れるようなそんな色してるんですよ、どことなく。すこいんですよ。千丈や黒部の内蔵助谷もそういう色なんです。いい沢だけじゃない。やっぱり水がきれいすぎるんだよね。

○ 湯俣、水股の合流点から上では横沢ついでう沢にだけイワナがいるんです。天然のイワナで大町近辺では見られないイワナがおるんです。籠川にも鹿島川にも天然のイワナはおるが数は少ない。横沢の天然のイワナは、割合幅が広くて赤い斑点がきれいに出来る。三俣蓮華から降りて釣れば釣れるけど、高瀬の方からは横沢に行かれない。まあ山に慣れた釣り好きな人が行くには訳もないが、ちつと魚釣るかくらいの人は簡単には行かれないとこです。雨にでもいったん降られれば帰ってこれないしね。人が行かれないから横沢にはいまでもいともいえます。

○ 黒部の内蔵助から本流へ流れ落ちてきたところにはいるんだが、沢へは上がらない。籠川も扇沢との合流点から上にはいない。これも水質が違うんですよ。昨年漁業組合で下で釣ったイワナを二千匹ばかり持って放したんだが……。

○ 鹿島はみんな水質はいいですよ。小冷、大冷、大ゴも大川もどんなに奥へ行ってもイワナはいる。だからやっぱり釣物だね。釣物の解け具合ね。それで棲めないんじゃないかなと思う。(おわり)

《参考文献》

『イワナⅡ 黒部最後の職漁者』
曾根原文平 口述 白日社

ライチョウ飼育の思い出

— 森山祐介さんを偲んで —

北條 廣美

これは昭和六十一年四月から昨年十月まで山岳博物館のライチョウ飼育にご尽力いただいた北條廣美さん（七十七歳）の文章です。

森山祐介さんも昭和六十一年十一月から昨年、体調を崩されて五月に退任されるまで、十年にわたり同じくライチョウ飼育に力を注いでくださいましたが、惜しくも八月に六十九歳で世を去られました。

長年のライチョウ飼育について、また汽車の両輪のように、二人して歩まれた森山さんの思い出を併せ、記録に留めさせていただきます。

（大町山岳博物館）

十年余りにわたりライチョウ飼育を共にやってきた森山さんが逝去されて半年余り経ちますが、未だに飼育舎でリングをトントン刻んでいるような気がしてなりません。生老病死は誰もが避けがたいところながら……、あと十年は生きてほしかったと残念でなりません。霊前で「なぜ私より先に逝ったか」と大声で怒りたい心境です。飼育係を引退にあたり、森山さんを偲びつつ思い出を記したいと思います。

森山さんが、体調がすぐれず自宅で静養に入っていたのが昨年の三月二十日でした。その

後度々見舞ったところ、ライチョウのことが気になるらしく、いつも「餌をくれに行かなければいけない」と相当気にしていました。

七月下旬ごろのことです。私が玄関で奥さんに調子を伺っていると、森山さんは寝室で私の声を聞きつけて廊下を這って出てきて、「ライチョウのヒナは生まれたか」と尋ねました。「私は「四羽生まれてみな元気だ。もう六十グラムくらいになっている」と話すと、うなずいて、「近いうちに餌くれに行く」と言いました。私は「心配しないで静養してください」と辞しましたが、これが最後の別れでした。

動物に接するには第一に愛情で、ある時は可愛がり、ある時は叱ることも必要だと私は思っています。

朝、その日初めて飼育舎に入る時にはライチョウに挨拶をしました。応答があればまず



オオライチョウを飼育中の森山さん

安心。応答がないと、さては遁走か死んだかと室内を探すこともたまありました。いつも、どこからともなく出てきてガーとひと声鳴くのですから、まるで私はからかわれているように思ったものです。

つぎに健康状態のチェック。糞は正常か、軟らかくないか、乱れていないか、色は、臭いは……、そして餌の食い量、行動などの詳細なチェックと仕事は続きました。

「雷鳥」の名の由来には諸説あるようですが、私は飼育経験から雷の稲妻のようにすばしっこい行動ゆえと思っています。と言うのも、別の飼育舎へ移す時など私の手ではなかなか捕まりませんでしたし、どんな障害物（マツの枝など）があろうが、ここかと思えばまたあちらと自由自在に迅速に歩きまわり、驚くばかりだったからです。

ライチョウは四月中ごろともなると繁殖期をむかえ、オスの縄張り意識はヒナが孵化する七月初めまでとても高くなり、騒々しくもなってきます。人を恐れず、いくら叱っても攻撃してきます。掃除中に中指をつつかれたこともたびたびで、舞い上がったオスに頭をつつかれたこともありました。

しかし孵化に始まり立派な成鳥に育てることに成功した時の喜びが、なんととっても最も印象に残っています。

十余年にわたりライチョウと関わり合ってきたとき、メスの献身的な子育て、オスの繁殖期の警戒、防護、闘争などの行動に幾度も接し、私たちの社会生活のほとんどは動物から学んだことを強く感じました。しかしオスが子育てに全く協力しないのはどんなものでしょうか？



前列左から3番目森山さん、2番目は筆者（山岳博物館開館40周年記念祝賀会 H3.11.1にて）

そのほか、冬場にたまたま水道が凍結して飼育舎の水洗いができなかつたり、夏と秋に飼料の青菜が傷みやすく、保存に苦心したことも、またこの仕事のおかげで包丁さばきがうまくなり、野菜や果物の皮むき、正月の「なます」作りに大いに役立ったこともつけ加えておきます。

最後になりますが、毎年幾度か行われた職員懇親会での楽しい語らいも忘れられません。会が終わっての帰り道、宝石をちりばめたような美しい大町の夜景を眺めながら、森山さんと二人して歩いたことなども思い出します。ご冥福をお祈りします。

山と博物館 第42巻 第3号
一九九七年三月二十五日発行
発行 千歳長野県大町市大字大町八〇五六一
大町山岳博物館
TEL 〇二六—一三三—〇二二
印刷 大糸タイムス印刷部
定価 年額 一、五〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号 〇五四〇七—一三三九三